



1：中庭。廃材となった傷物のレンガを並べて中庭の平場を整備。開設当時、少しずつ草花を植えている時の様子。／2：「喜八」全景。既存の玄関ドアにセルフビルドで柿渋を塗った和紙を貼り、ウレタン塗装を施した。／3：応接室。解体されたお寺の一枚板の扉を開設祝いにいただき、応接テーブルで使用。／4：除雪の様子。3月の暖気で屋根の雪が一気に落雪。ブロック塀を超えて前面の道路まで雪が飛び出してしまい、大慌てで除雪。



5：収穫。喜八の菜園でとれた曲がったキュウリとふぞろいの野菜たち。／6：まかない。恥ずかしながら、堀尾手製のまかないパスタです。写真提供／堀尾浩建築設計事務所

ほりお・ひろし

1965年北海道白老町生まれ／1990年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了／1990年日建設計入社／1992年アトリエンク入社／2007年堀尾浩建築設計事務所開設／2009年「空方の家」（本誌0912）で日本建築家協会北海道支部住宅部会フキノトウ賞受賞／2012年「美幌の家」（本誌1103）第12回JIA環境建築賞受賞／2013年「当麻の家」（本誌1306）日本建築家協会北海道支部住宅部会ハルニレ賞受賞

URL：http://www.kihachi-hh.jp/  
喜八の出来事（blog）：  
http://www.kihachi-hh.jp/dekigoto/



## 私の事務所

### 堀尾浩（建築家）

——私たちスタッフは、事務所のことを親しみを込めて「喜八」と呼んでいます。この建物の「愛称」みたいなものです。生み出されることの大半は「喜八」が舞台です——

※堀尾浩建築設計事務所HPより抜粋

#### 喜八との出会い

札幌の街中に建つ築60年は経過した、この木造一軒家との出会いには少なからず縁を感じている。15年所属していた以前の事務所を退社し個人事務所を開設しようと決めていた時、漠然と今度の事務所は古い民家を改修した仕事場兼半分住宅のような、暮らしの時間が同居しているような場所がよいと思い描いていた。そこには、今までの公共建築を主体とした設計活動から、住宅という、より個人の時間を支える場を設計していくことになるだろうという意識があり、これまで自分の日常では稀薄だった「暮らしの実感」を得たいと考えていたような気がする。

退職送別会の帰り道、酔い醒ましに深夜の住宅街を歩いている途中でその建物を見つけた。内部からの灯りや人の気配もない建物の中を覗いてみると、何かの事務所として使われていた痕跡はあるものの、今は空き家となっている様子。玄関部分に切妻の三角屋根が架かっている付まがいが印象的でとても気になったけれど、決まった仕事もない状態での独立。まずは知人の設計事務所の一角を間借りするスタートとなった。

それから半年も経たない夏に急遽、事務所を借りる必要に迫られ、真っ先にあの時の木造一軒家を見に行った。持ち主を探し出し、内部を見せてもらう。当然そのまま使えるような状態ではなかったけれど、すぐさま賃貸契約をして8月には事務所機能の引越しを完了させた。この新しい門出。喜びの8月を記憶する意味も込めて、「喜八」という愛称を付け、今に至っている。

#### セルフビルドで環境を整える

喜八での設計活動も今年で8年目に入る。その間ここで過ごした時間や出来事は、それまでの、言葉を抛りどころに建築を考える思考から、体験により身体を通して実感したことを頼りに建築を考えてみる、というスタイルへ少しずつシフトしていく「きっかけ」を与えてくれたように思う。

事務所に一軒家を選んだ理由に、仕事場としての機能を確保しながら暮らしの一部も取り込んだ場所に……との思いもあったので、改修も自分たちの手で決めて、まずはランバーコア材による机、作業台、本棚を製作し設計活動の場を整備しつつ、応接コーナーには新たに木製のトリプルガラスサッシとパネルヒーターを取付けた。床はトドマツのバラ板貼り、既存の玄関ドアやパーテーションには和紙を貼ったうえで柿渋を塗るなど、多くの方の応援のもとセルフビルドで改修作業をしていった。そうやって自分たちの手でつくることで、家づくりで使用する素材の特

性や経年変化などをクライアントに伝えられると同時に、断熱サッシや暖房機器の性能を体感してもらえればとも考えた。

痛みの激しかった木板貼りの壁と屋根には、補修と再塗装を施した。更に力を入れたのが建物周りの外構整備で、建物正面にある力強くも街に対してどこかよそよそしいブロック塀を緑で包むためのツタを植え、中庭側の敷地境界には針葉樹の低木、廃材レンガによる中庭の平場づくり、更には小さな菜園スペースをつくることにした。こうして自分たちの働く環境を自らの手で整えることで、こだわりに比例して手間がかかることも改めて実感。一方で、草花の生長を身近に感じながらその手入れに勤しむ「手間を楽しむ」時間がスタートしたのだ。

#### 身体を通して自然と対話

喜八は、コの字型の平面に切妻の屋根が架けられた平屋建ての建物だ。コの字に囲まれた中庭は、冬は雪の堆雪場となる構成で、この地域の気候の特性に応じた当時の住宅の一般的な平面形式であったと思われる。しかしながら、断熱・気密工法などない時代の建物だけあって、以前の入居者が多少断熱補強をしていたものの、壁と床の間からの隙間風はすさまじく、初年度の寒さは尋常ではなかった。長時間底冷えのする事務所です仕事していたスタッフが霜焼けになったほどだ。翌年よりスタッフと共に断

## 除雪、草取り、断熱の工夫——暮らしの手間を楽しみ、未来へ繋ぐ

熱補強や隙間を埋める工事を行い、以後毎年少しずつ改善しながら、北国における高断熱・高気密の大切さを身をもって実感した。

また、一晩に数十センチも雪が降り積もることがある北海道にあって、自分たちの家屋周辺の除雪は冬のキツイ仕事のひとつだ。だからこそ、できるだけ除雪作業を緩和する工夫が積み重ねられてきた。近年の北海道における都市部の住宅地では、屋根雪を落とさない無落雪の屋根が一般的なが、喜八は当然旧来の落雪屋根で、降り積もった雪の除雪と、圧縮され重みも増している屋根からの落雪除雪も……となると大変な重労働。こちらの仕事の都合に合わせてくれるわけもなく、除雪の時は忙しい仕事の手を止めてスタッフ総出で汗だくになり、時には数時間も作業を行うこともある。家庭用のガソリン式除雪機も普及してきたけれど、我々は筋肉痛と闘いながらの人力除雪でしのいでいる。こういう作業の時ほど人手のありがたさを感じることはない。

旧来の建物だからこそ感じられる自然の厳しさや手抜きのできない面倒な作業をしながらも、こうした日常が、便利とは程遠かった先人たちの生活に思いを馳せる時間ともなり、あらゆることが速くて便利な方向に進んでいく毎日だからこそ、意味があるのではないかと感じている。

冬の除雪に対して夏場のいちばんの手間は雑草取り。植物の生長はとてもゆっくりで、最初の1、2年は大地に深く根を張っていくのだろうか、見

た目にはほとんど大きな変化がなかったものの、3年目から怖いぐらいの勢いで茎を伸ばし葉を繁らせて生長し始める。低木だったはずの針葉樹も、今は中木といえるぐらいの大きさに育っている。それは雑草も同じで、週末の仕事は庭と菜園の手入れの時間に充てられることも多くなった。それでも、そうして手間をかけた後の収穫は楽しいもので、菜園の野菜は事務所の「まかない」で活躍してくれる。菜園からもぎたてのトマトとキュウリでサラダを。茄子やししとう、ズッキーニ、青じそなどを適当に収穫しパスタをつくったりもする。この「同じ釜の飯を食う」まかないの時間も日々の仕事のことだけではなく話題も多岐にわたり、私にとってはスタッフとのコミュニケーションを図るうえで大切な時間になっている。それでもちょっと油断をして収穫を怠っていると、食べきれないほどのキュウリやミニトマトが実っていて、今度は上手く保存することを考えるようになり次第にビクルスや浅漬け、トマトピューレなどを自作したりするようになった。

このような日常のおかげで日々の天候や温度、雨の量など、今までより微細に季節の変化を感じている自分に気が付く。

#### 過去を介して未来を考える

こうした体験から、豊かに広がる自然を前に、人と自然が大きな窓を介して結ばれるだけではなく、本当の意味で暮らしに根づいた、自然と

人を結ぶ場を建築として実現できないかと考えている。

手間のかかる相棒・喜八で過ごしてきた時間も7年が過ぎようとしている。ここで過ごすために不可欠な手間のかかる時間や容赦のない厳しい自然環境は、建築を考えるうえでとても多くの示唆を私に与えてくれているが、そのことはまったく特別なことではなく、数十年前にはどこにでもあった暮らしの断片なのだとすることも実感している。スタート時2名だったスタッフも、今年は新スタッフが加わり計4名。自分も含めると5名の所帯となり、以前は気軽に作っていたまかないも、今は少々気合が必要な人数になった。若い世代との交流はいつも新鮮で楽しく、自分と異なる感性にハッとさせられることも多い日々だが、若い彼らがこの喜八の環境で過ごすことで新たな視点を取り入れ、これからの設計活動に活かして欲しいと願っている。それはきっと「過去を介して未来を考える」という、至極当然のことなのだとも思えるし、そうした当たり前のことを私に気付かせ学ばせてくれたのが喜八であり、相棒たる所以なのである。少々傾きも大きくなってきたように感じられる相棒。これからどのくらいこの場所にいられるかは分からないけれど、これからもこの場所で私たちの建築づくりを続けていこうと思うのである。

——これからも、生み出されることの大半は「喜八」が舞台です——